

実践研究論文

異文化対応力を高めるグローバル人材育成の 取り組みの一考察

青柳 達也* ・ 角 和博**

A Study in Developing Inter-Cultural Competence as a Global Citizen

Tatsuya AOYAGI* and Kazuhiro SUMI**

【要約】

情報化とグローバル化が急速に進行する現代世界において、我々は日常的に国籍、男女、世代、家庭環境等の異なる文化を持つ「異文化」と接触・交流している。文化的背景が異なる人々が協働し、国境や地域を超えて共存するグローバル社会がますます拡大している中で「異文化コミュニケーション」はこれまで以上に大きな重要性を持つようになってきた。そのようなグローバル社会への変化を鑑み、様々な大学は英語能力を高めるだけでなく、異文化対応力を向上させるグローバル人材の育成の取り組みを実施している。本稿では、現在実践されている特徴事例を考察し、今後のグローバル人材育成の取り組みへ示唆することを目的とする。

【キーワード】

異文化対応力, 異文化理解, 異文化コミュニケーション, グローバル化, グローバル人材育成

1. 研究の目的

情報化とグローバル化が急速に進行する現代社会では、留学、ビジネス、旅行、海外駐在などで日本人が海外に行く機会が増加しており、日本国内においても海外からの留学生や移住者が増加している。また、転職、企業の合併、外国人労働者の増加、働き方の混在を受け入れる企業の体制の変化や、価値観、考え方、世代間のギャップなども含めた多様性の意識改革が日常的にささやかれるようになってきた。

このように海外だけのことではなく、身近なグローバル化が進み、異文化対応力・理解力・コミュニケーションが求められる世の中への変化に伴い、各種会議ではグローバル人材育成に関しての定義や提言を示している(表1参照)。しかしながら、これらの定義は、産業界の要請に対する形で議論が進められてきており、語学力、思考力、問

題解決力、主体性、コミュニケーション能力など、社会に出た際に効果的、効率的に業務を遂行できる能力を中心として捉えられている傾向にとどまっており、グローバル人材育成において本質的には不十分だと言える。例えば、地球的に平和や共生を求める視点を含めることも必要であると考えられる。この視点は、特に大学教育におけるグローバル人材育成においては必要であると言えよう。

本研究では、様々な大学がグローバル人材育成の取り組みを行っている中で、進取的な取り組みの実践事例を考察し、グローバル人材育成に必要な考え方や方法を提案する。

2. 研究の方法

筆者は以前、福岡大学グローバル・アクティブ・プログラム(G.A.P.)講座において、2013年の立ち上げ当初から3年間にわたり講師の一人として

*佐賀大学全学教育機構非常勤講師

**佐賀大学教育学部

指導をしていた。その後、同大学のG. A. P. 科目の「Introduction to Global Career Design」におけるゲストティーチャーと、G. A. P. 講座の「グローバル対応力育成ワークショップ」の運営を担当しており、現在に至っている。筆者の実践に加えて、福岡大学G. A. P. 講座に関する先行研究の分析をする。また、文部科学省スーパーグローバル大学等事業「スーパーグローバル大学創成支援」と

して採択された明治大学「世界へ！ MEIJI8000 - 学生の主体的学びを育み、未来開拓力に優れた人材を育成-」におけるグローバル戦略の取り組みについて先行研究をもとに分析をする。これら2大学の特徴的な事例から大学におけるグローバル人材育成に効果的な取り組みについて示唆を得ることとする。

表1 各種会議におけるグローバル人材に関する定義

「産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会」(経済産業省, 2010)	「主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドをもつ同僚、取引先、顧客等に自分の考えを分かりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、更にはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材」
「産学連携によるグローバル人材育成推進会議」(文部科学省, 2011)	「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」
「グローバル人材育成推進会議」(内閣官房, 2012)	我が国がこれからのグローバル化した世界の経済・社会の中にあって育成・活用していくべき「グローバル人材」の概念 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力 要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ 「グローバル人材」に限らずこれからの社会の中核を支える人材に共通して求められる資質としては、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと(異質な者の集団をまとめる)リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等を挙げることができる

3. 福岡大学の事例

福岡大学では、2013年(平成25年)より「アジア諸国との関係を中心にして行うグローバル人材育成」を目的に掲げ、グローバル・アクティブ・プログラム(以下G. A. P.)を押し進めてきている。8月もしくは2月の3週間、希望する国の研修施設で行われる海外研修に参加する前に、G. A. P. 講座という5週間に渡る短期集中型留学前教育の受講が義務付けられている。G. A. P. 講座は、海外経験が少なく、英語力も十分とは言えない学生が、研修先の現地での生活や授業にスムーズに溶け込み、研修成果をあげることができるようカリキュラムが組まれている。

筆者は2013年から3年間にわたり「英語ドラマ・メソッド」のワークショップを担当し、①英語と身体をコミュニケーションツールとして捉え、実

際に表現をすることを実践する、②コミュニケーションで欠かせない基本的な人と人の生のつながりは、文字や言葉では表すことのできない身体と身体との対話を体得する、③シーン作り、ゲームや即興、演技などの表現のカタチを通して、様々な気持ちに向き合い想像力を働かせることを目的とした。コミュニケーション理論やコンテクストについて理解をした上で、英語と身体を使ったゲームやエクササイズを通じて、座学ではないワークショップ形式で英語と身体でコミュニケーションをとる実践を行った。活動言語はすべて英語で行い、英語が完全に理解できていなくても何となく理解をしてやってみるといった、実際に留学をした際に経験をするようなことの疑似体験にもなっている。また、与えられたタスクを英語で実施するため、日本語で考えてそれを翻訳をするという

ことではおいていけないため、その場で即興 験する内容となっている。活動の内容を表2に示的に英語で考えて英語を発して対応することも体 す。

表2 「英語ドラマ・メソッド」活動一覧

Passing the Clap (数字)	1 グループ6名～8名で円になり、一つの拍手をパスをするようにまわしていく。次に、パスをする際に数字の1から数え始め、1～50まで止まることなくまわすようにする。途中で間違えたら、1からやり直しをする。50～1、奇数のみ、偶数のみ、4の倍数の時に声を出してその数字を言わないなどのバリエーションでだんだんと難しくしていく。
Passing the Clap (物事)	数字ではなく、与えられたカテゴリーのもとに、その名称を言葉に出していく。例えば「Vegetable」などのカテゴリーであれば、「Tomato」「Lettuce」などを言う。カテゴリーをどんどん変えていき、英語ですぐにその物事が言えるように訓練をする。
Mime Play Catch	1 グループ6名～8名で円になり、1個のボールをパントマイムでパスしていく。その際に「Red Ball」ということを決め、投げる時にかならず言うようにして、まわしていく。次に、2個目のボールは「Tennis Ball」、3個目のボールは「Basket Ball」というように徐々にボールを増やしていく。一度に3個のボールが行き交い、なくならないようにまわしていく。
Yes, and…	1 グループ4名～6名で円になり、円の中で右回りか左回りで順番がまわっていくかを決める。1人が隣の人に対して何か思いついた物（人物や役職など人に関するものはNG）をYou are a pencilのように言う。思いついた物をあまり編集せずすぐに言葉にする。言われた人は、それをそのまま受け入れ「Yes, I'm a pencil」と言う。しばらく何度かまわってきたら、次のステップとして、今度は「Yes, I'm an expensive pencil」など、一言加えた反応に変える。そして、今度はその物の気分になって一言セリフを「Nobody can afford to buy me」等と言う。
What are you doing?	1 グループ4名～6名で円になり、円の中で右回りか左回りで順番がまわっていくかを決める。一人が何か作業などの体を動かす動作をする。隣の人が、その動作が何がわかったとしても「What are you doing?」と尋ねる。尋ねられた人は、自分がやっている動作ではないことを言葉で言う（言葉と動作は全く違うものを示して）。訪ねた人は、言われた動作（例えば、I am walking a dog）を身体で動かして動作をする。
Contentless Scene	2人組になる。複数の状況やキャラクター関係性があてはまるコンテンツになっているセリフが渡され、どのような状況やキャラクターであるかを話し合っ決めて決める。結末だけは、セリフを加えていいことになっているので、その内容を考える。内容が決まったら、セリフの言い方や演技の仕方を考えて練習をする。最終的には発表をする。

また、「コミュニケーション能力育成ワークショップ」と題した日本語による演劇的手法によるコミュニケーションの実践をするワークショップも開講されている。上記で述べた「英語ドラマ・メソッド」と類似している部分もあり、「G. A. P. 講座を受講する学生にとっては、初対面の相手であるクラスメートとコミュニケーションをすることだけでもかなりハードルが高いと考えられるので、英語の使用によってさらに負荷をかけるのは避け、身体全身を使用したコミュニケーション能力の育成に特化する」⁴⁾という理由もあり、2014年からは「英語ドラマ・メソッド」は排除された。異文化

である他者をつながるトレーニングを、まずは参加者同士で実施することで積極性が高まることにつながっている。内容は身体と言葉を使ったゲームなどの他に、漫才を考えさせて発表をしている。

他にも、「Interactive English」と題し、「国際センター所属の専任教員2名と留学生TAによるワークショップでは、「コミュニケーション能力育成ワークショップ」で培ったコミュニケーション能力を英語に転化することを目標とし、授業はすべて英語で行われ、インタビューやグループ学習、スキットやスピーチといった課題をTAの協力を仰ぎながら実施」している。「TOEIC対策講座」も実

施しており、「スコアや正解数という目に見える形で英語力を把握できることが学生の学習意欲向上に寄与し得る」⁴⁾という意図で、スコア100点アップを目指している。

さらには、日本で学んでいる世界各国かの留学生との「グローバル対応能力育成ワークショップ」(協力：株式会社LbE Japan)を実施することで、今度は英語を使ったコミュニケーションの実践をしている。日本人学生の傾向を踏まえて、他者というものの定義を徐々に広げる段階を踏むことにより、異文化対応力を上げることができるという仮説を基にした事例と言えよう。

このワークショップはG. A. P. プログラムの立ち上げの当初から実践され、筆者は2016年から運営の担当をしてきている。このワークショップでは、1グループ10名以下になり、各グループごとに留

学生が配置され、ファシリテーターの進行のもとに、すべて英語で実施される。留学生自身の言語はあるが、実質世界の共通語と言える英語でお互いにコミュニケーションをとっていることを日本人学生も目の当たりにし、英語の必要性を肌で感じることができるものとなっている。アクティブラーニングの手法により、オリジナルで作成されたワークブックを活用し、グローバルな知識のインプットだけでなく、最終的にはプレゼンテーションをすることで、得た知識をアウトプットする活動となっている。留学生人材が学びのリソースとなるため、このワークショップに関しては、株式会社LbE Japanが専門的に実施に向けての留学生のトレーニングなどを行っている。活動の内容を表3に示す。

表3 「グローバル対応能力育成ワークショップ」活動一覧

Mutual Introduction	各グループで、参加者は留学生にそれぞれ自己紹介をする。参加者は留学生にインタビューをする。留学生は参加者を、参加者は留学生を他のグループに紹介できるように準備する。他のグループとペアになり、それぞれのグループが発表をする。
Culture Shock Experience	留学生が、日本で感じたカルチャーショック体験を、映像などを見せながら説明をする。質問も受け付ける。
About where they are from (Country or Region)	留学生が、自分の国のことを、画像などを見せながら紹介する。小物や衣装など、触れることができる物も使って説明をする。
Why I study in Japan	留学生がなぜ日本に来て学んでいるかを発表する。志や夢についても紹介する。
Discussion on “Significance of Intercultural Experience”	留学生と異文化体験に重要性についてのディスカッションをして、どのような可能性があるのかを見出し、意見交換をする。
Group Presentation	各グループでディスカッションで話あった内容をもとに、発表の準備をし、練習をして発表をする。

(出典：株式会社LbE Japan作成のワークブック)

4. 明治大学の事例

『「世界へ！MEIJI8000」とは、毎年の卒業生8000人すべてを、世界で活躍できる「未来開拓力」に優れたグローバル人材として社会に送り出す、10

年間のプロジェクト』として、8つの取り組みを打ち出している(表4参照)。

表4 明治大学が目指す8の主な取り組み

2人に1人が留学	2023年には年間4,000人の日本人学生を海外へ送り出します。 「未来開拓力に優れた人材」となるには主体的学びが大切であり、その最も重要な手段のひとつが海外への学生の送り出しです。学部卒業年限の4年間では16,000人となり、全学生数（約32,000人）のうち2人に1人が在学中に留学することになります。
学内全てが国際体験空間	2023年には年間4,000人の外国人留学生を受け入れます。 明治大学は日本語学校の教職員が留学生に勧めたい大学を選ぶ「日本留学アワード」で、文系部門4年連続（2012年～2015年）1位を獲得するなど高い評価を受けてきました。地域連携活動、混住寮、セミナーハウスでの討論など、学生同士の学び合い（ピアラーニング）を通じ、人材育成のダイナミックなサイクルを生み出していきます。
専門科目を英語で学ぶ	専門科目を英語で学ぶことで、世界に通用する強靱な知識・思考力と英語スキルの獲得が可能です。専門分野の理解をさらに深めるためにも、英語学位コースや英語専門科目の充実が欠かせません。また、外国籍教員の割合を増加させることで、より多くのグローバル人材輩出を目指します。
実践的英語力強化プログラム	英語で専門分野を勉強するには、アカデミックな英語力の向上が必要不可欠です。明治大学では、オンラインやe-learning講座が充実しています。また、語学力が留学基準に満たない学生には、語学留学後専門課程に進める「ブリッジ型留学プログラム」が用意されています。
世界に飛び出す100の国際プログラム	ケンブリッジ大学ペンブルック・カレッジ夏期法学研修、フレンチファッション・プログラム、UCバークレー、リヨン政治学院留学プログラム、ウォルトディズニーワールド（Walt Disney World）提携アカデミックインターンシップ留学プログラムなど、60（2013年度現在）を超える多数のプログラムを展開しています。そのほか、留学支援機関のELS等と連携した留学プログラムの導入などを全学的に拡充し、学生が世界に飛び出す100のプログラムを用意します。
戦略的海外拠点と国際ネットワーク	「明治大学北京事務所」「明治大学マレーシア・サテライト・オフィス」などに加え、タイ・バンコクには「明治大学アセアンセンター」が設置されています。アセアンセンターは、日・アセアン相互理解に長けた人材育成、企業への接続など、東南アジア地域のグローバル人材育成センターとしての役割を担っており、教育研究プログラムの相互乗り入れを行っています。今後は、トップスクールである世界の戦略的協定校をコアとして、授業相互乗り入れ、ICTで結んだ授業展開など、教育・研究ネットワークを強化します。
世界都市東京からの新たな知の想像	都市型大学とは、産業界・官庁との連携、情報の集積・発信がなされることを意味します。先端数理科学インスティテュート、バイオリソース研究国際インスティテュート、ガスハイドレート研究所などの各研究拠点が、国内外でのハブ機能を果たしています。様々なステークホルダーと連携して新たな知を創造し、大学院も含めた教育の高度化をすすめます。
新たな学びの可能性	アクティブラーニングを主体にし、春学期・秋学期を二つのタームに分けた2学期4ターム制の学年暦が導入されます。 必修科目を配置しないタームを作るなどで、学生自らが、主体的学びの時間を作り出します。留学、研修、実習、インターンシップ、ボランティア等の海外体験など、自ら学ぶ意欲を形にすることで、学びの可能性は無限大に広がります。

（出典：スーパーグローバル大学創成支援「世界へ！MEIJI8000」ウェブサイト）

明治大学の六野耕作副学長の日本経済新聞におけるインタビューによると、「内向きといわれる大学生も短期留学などで人生観が変わるような体験をすると驚くほど成長するという。」明治大学は2009年、「国際化拠点整備事業（グローバル30）」

への採択後、グローバル化を進めてきている。「世間では「内向き」で「勉強しない」大学生というイメージが強いが、実は日本人学生の潜在能力は極めて高い。世界の学生と競い合う中で一度は挫折しても、挫折をバネに立ち上がれば驚くほどの

力を発揮する。この6年間でUCBなど米国5大学に150人を派遣したが、参加者の約4割がGPA 3.0以上の好成績を収めている。」⁵⁾と大六野副学長が述べており、日本の大学に在籍しながらも、休学をするのではなく、海外で取得した単位を認めることや、ダブル・ディグリー・プログラムについても積極的に進めている。

ダブル・ディグリー・プログラムは、日本では「複数学位取得制度」とも呼ばれ、日本と海外の2つの大学の学位を取得できる留学プログラムであり、日本の大学に在籍しながらも海外の大学の学位がとれるメリットがある。このプログラムを活用するには英語力が必須となるが、これまで多くの日本人が「英語を学ぶ」目的で留学をしてきたことに比べ、「英語で学ぶ」ことに変わることでチャレンジは大きい分、モチベーションも上がるものとなり、学生にとっても可能性が広がることになる。何のために留学をするのかという目的を見直し、明治大学のように、英語を学ぶだけの留学から脱却をすることが、グローバル人材育成には必要なのではないだろう。

5. 考察

福岡大学の学生数は約20000人であり、文部科学省「国際化拠点整備事業(グローバル30)」に応募したが採択はされなかった経緯がある。採択されなくても、されても当時の衛藤卓也学長はグローバル戦略を自前で進められきてきた。明治大学の学生数は32000人である。明治大学は文部科学省「国際化拠点整備事業(グローバル30)」に採択されたため、大規模なプロジェクトを打ち出すことができている。共に私立大学であり、それぞれ特徴的なグローバル戦略を打ち出している。

それぞれの大学は、日本人学生の「短期留学」というものにフォーカスをおき、海外の留学生の受け入れを増やし、国内外において「人生観が変わるような体験」をする環境を整えることに重きをおいていると言えよう。日本人学生は人間関係を狭い範囲にとどめようとする傾向が多くあり、それでは新しいことにチャレンジをするような精神は生まれにくい。短期留学をすることで、日本

人の価値観が通じない体験をし、殻をやぶることができれば、その後の学生生活や就職にも影響がでることになる。その結果を求めるには、留学をする前の国内での取り組みが重要である。特に福岡大学においては、3週間の短期留学に対して、5週間の準備をしてのぞむカリキュラムとなっている。

異文化対応力を高めるグローバル人材育成の課題としては、短期留学を終えてからの継続性と言えよう。そこで短期留学で学んできたことを継続的に有効に活用し、チャレンジできるプログラムや機会を用意することも大切であると言えよう。おそらく、日本で学ぶ留学生人材はそのカギとなるに違いない。留学生と活動をする機会を通じて、継続的に英語を使ってコミュニケーションをとることや、異文化に出会えることの実践の場は、留学生人材を活用する他は簡単には作れない。一般的に日本で実践されている英語教育にも共通した課題と言える「英語を使う必然性を作ること」が日本国内では難しい。今後は、留学事前のプログラムだけではなく、事後プログラムにおいても開発や実践事例の研究が進められるであろう。

さらに、日本の学生にグローバル人材とはどういうものかというビジョンを持たせることが今後より一層求められるのではないだろうか。明治大学のように、留学というものをすでに「英語も学ぶ」だけの目的で終わらせず、英語で学ぶ喜びを実感できるように変えていつている。従来の英語教育を留学という物に置き換えた古典的な考え方の時代ではなくなっている。確実にグローバル化へ進んでいるため、英語を使って対等に議論をしあえるようなチャレンジを与える役目が、グローバル人材育成を目指す大学にはあるのではないだろうか。グローバル人材像を掲げ、そこに向かうプログラムを、それぞれの大学で作っていき、本当に世界を舞台に活躍できる人材を輩出していただきたい。

文献

- 1) 経済産業省「産学人材育成パートナーシップ
グローバル人材育成委員会」
http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/global_jinzai.htm (アクセス: 2018年12月10日)
- 2) 文部科学省「産学連携によるグローバル人材育成推進会議: 産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shituu/sangaku/1301460.htm (アクセス: 2018年12月10日)
- 3) 首相官邸「グローバル人材育成推進会議」
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/kanjikai/index.html> (アクセス: 2018年12月10日)
- 4) 佐々木有紀, 新田よしみ, 大津敦史「学内外の多様な人材を利用した短期集中型留学前教育に対する受講者の評価: 受講アンケートから見えてくるもの」LET Kyushu-Okinawa BULLETIN 18(0), 57-70, 2018 外国語教育メディア学会 九州・沖縄支部
- 5) 日本経済新聞「短期留学への挑戦 人生観変わり成長 大六野耕作・明治大学副学長」2017年11月6日付朝刊

